

聖書：Ⅱサムエル 18：1～33

説教題：ああ、アブサロム

日時：2019年1月13日（夕拝）

今、私たちはダビデの息子、三男のアブサロムが謀反を起こしたことによって、ダビデがエルサレムの都を追われ、逃亡生活を強いられているところを読んでいます。ダビデは危機的状況にありましたが、神の不思議な御手に守られてヨルダン川東側の地へと逃れることができました。そして態勢を整えて今日の18章でいよいよアブサロム軍との決戦に臨みます。ダビデは自分について来た民を3隊に分けます。それぞれの隊長は2節にある通り、ヨアブ、アビシャイ、イタイ。ダビデは自分も戦いに出たいと言いますが、兵士たちはこう言います。3節：「王様が出陣してはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、今、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうがよいのです。」そこでダビデは町にとどまります。ダビデは軍隊を送り出す際、隊長たちに5節でこう語りました。「私に免じて、若者アブサロムをゆるやかに扱ってくれ。」ここにダビデは自分の軍隊の勝利をもちろん願っていたとは言え、アブサロムの死までは望んでいなかったことが示されています。いつかこの息子と和解できる日が来ることをダビデは心のどこかで期待していた。しかしこれはこれから戦いに命をかけようとしている兵士たちにとっては複雑な言葉です。アブサロムはダビデたちを一掃して国を手中に収めようとしている反逆者です。彼こそは敵の元凶です。なのにこの場において「私に免じて、アブサロムをゆるやかに、云々」と語るとは、ダビデが最も心にかけて、案じている人は誰なのでしょう。この言葉が今日の章を読む上でのカギとなります。

さて6節以降を見ると、戦いはダビデ軍に有利に進んだことが分かります。合戦場はエフライムの森。ダビデの部下たちは長い逃亡生活を経てゲリラ戦に習熟していましたが、一方のアブサロム軍の兵士たちはそういう戦いには慣れていません。そのため8節に「戦いはこの地一帯に広がり、この日、剣よりも密林のほうが多くの者を食い尽くした」とあります。敵側の兵士たちは密林の中で方向感覚を失い、さまよい、飢え等によって壊滅的な状態に至ったのでしょう。

そして誰よりも一番の餌食となったのはアブサロム自身でした。9節で彼はダビデの家来たちとバツタリ出くわし、逃げ始めますが、何と驟馬が大きな檜の木の茂った枝の下を通った時、アブサロムの頭が檜の木に引っかかり、彼は宙づりになってしまいます。そして彼が乗っていた驟馬はそのまま行ってしまった。14章にあった通り、美男子でフサフサ頭の彼が、あまりにも悲惨な状態で宙ぶらりんになってしまったのです。

これを見た一人の男がヨアブに報告します。するとヨアブは急いで出て行ってアブサロムを殺しました。先のダビデの指令をどう聞いていたのかとも思いますが、ヨアブは元来こういう人です。彼としてはダビデの感傷的な言葉に従ってはいは現実的な解決はないと考えていたのでしょう。敵の元凶アブサロムを生かしておいてイスラエルの国をうまく治めることなど不可能。時機を逸さずに手を下す以外、この国の安定化を図る道はないと考えた。また彼は実はアブサロムをエルサレムへと引っ張って来た張本人でもありました。彼としてはアブサロムをダビデの次の王として準備して国の安定化を図ろうとしましたが、期待したようには動かなかったアブサロム、かえって面倒な事件を起こしたアブサロムへの恨みや怒りのような感情もあったのかも知れません。17節にある通り、アブサロムの死体は取り降ろされ、穴に投げ込まれ、その上に非常に大きな石くれの山、石塚が立てられました。これはヨシュア記のアカンを思い起こさせる出来事です。アブサロムはこうして緩やかに扱われるどころか、呪われた者としてあわれな最期を遂げたのです。

さて、この章の残りの部分はアブサロムの死がダビデにどのように告げられたのか、そしてダビデの反応はどのようなものであったのかということに関心が向けられます。19節で、これまで伝令役として働いて来たアヒマアツが一刻も早くこの勝利のニュースをダビデに届けたいと願い出ます。しかしヨアブはダビデが戦いの結果よりアブサロムの様子に関心を抱いていることを知っています。だからこれが朗報であるはずはない。そこで代わりに外国人の兵士、クシュ人を遣わします。しかし若いアヒマアツはどうしても行きたいと主張し、後から追いかけて走って行きます。一方のダビデは二つの門の間に座って心配しながら報告を今か今かと待っていました。その彼のところに最初に到達したのはアヒマアツ。彼は28節で「平安がありますように」と大声で挨拶し、続け

て「あなたの神、主がほめたたえられますように。主は、王様に手向かった者どもを引き渡してくださいました。」と言います。彼としてはダビデが大喜びでこのニュースを受けとめてくれると考えていたでしょう。ところがダビデの第一声は「若者アブサロムは無事か」というものでした。この瞬間、アヒマアツはヨアブの言ったことの意味を悟ったのだと思います。それであいまいな答えをするにとどめます。そこに遅れて到着したクシュ人が入って来ます。彼は起こった通りのことを告げます。ここでもダビデは「若者アブサロムは無事か」と問います。それに対してクシュ人は言います。32節の後半：「王様の敵、あなた様に立ち向かって害を加えようとする者はみな、あの若者のようになりますように。」

これを聞いたダビデの反応が、この章のクライマックスです。33節：「王は身を震わせ、門の屋上に上り、そこで泣いた。彼は泣きながら、こう言い続けた。『わが子アブサロム。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブサロム。わが子よ、わが子よ。』」ここで「アブサロム」という言葉は3回、「わが子よ」という言葉は5回出て来ています。ダビデは「ああ、アブサロム、アブサロム、アブサロム」と言い、「わが子よ、わが子よ、わが子よ、わが子よ、わが子よ」と繰り返し叫んでいます。ダビデ軍は勝利したのに、それは全然勝利ではないかのように悲痛な声で泣き叫んでいます。敵の攻撃から解放され、反乱軍に打ち勝ったのに、ダビデは最悪の悲しみの中に突き落とされています。この書の著者は、このダビデの姿にこの章一番のスポットライトを当てています。絶望的な気持ちで泣き叫ぶダビデの姿に注目させたい。

私たちはここに何を見るべきでしょうか。その一つは今日の出来事もまた12章10～12節で見た、預言者ナタンを通して語られた主なる神の宣告の成就であるということです。かつて姦淫と殺人の罪を犯したダビデに対し、主は刈り取るべき報いがあることを宣告されました。「今や剣は、とこしえまでもあなたの家から離れない。」(10節)「見よ、わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。」(11節)これまでの記録は、この宣告がゆっくりと着実に実現して行ったことを記す記録でした。振り返ってみますと12章ではバテ・シェバとの姦淫によって生まれた子がすぐ死にました。13章ではダビデの長男アムノンが異母姉妹のタマルを陵辱し、家庭内に災いが起こり始

めました。ダビデの長男はダビデの姦淫をコピーするかのように行動し、それに怒った三男のアブサロムが長男アムノンを殺害します。そして遠くの地へ逃げて行きます。家庭内はズタズタです。続く 14 章ではアブサロムがエルサレムへ呼び戻されますが、殺人罪を犯した彼にダビデは適切な対処ができません。会うには会っても親子関係は冷たいまま。そのことに怒ったアブサロムが 15 章でついに謀反を起こします。ダビデは都落ちを余儀なくされます。16 章ではダビデを都から追い払ったアブサロムが、ダビデのそばめたちと屋上の天幕で寝ます。17 章ではダビデは命からがらヨルダン川東側の地域へ逃げ延びて行きます。このように一つの罪から始まって災いが次から次へと振りかかって来ました。しかしまだ終わりではなかったというのが今日の 18 章です。ダビデは三男のアブサロムを失い、深い悲しみに落ちています。しかしこれは単純に息子をもう一人失ったということだけではなかったでしょう。ダビデは 33 節で「ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに」と言っています。つまりこの責任は私にある！ということに彼は思わずにいらなかった。もちろんアブサロムにはアブサロムの責任として責められるべきところがあったでしょう。しかし自分があのバテ・シェバとの姦淫の罪さえ犯さなければ、そしてその夫ウリヤを殺すことをしなければ、こんなことにはならなかった！あの罪が発端となって、自分と自分の家族に次々に災いをもたらし、今アブサロムまで死なせてしまった！息子を失うだけでも親としては耐えられないのに、ましてや自分の罪がその原因の根っこにあるという良心の呵責を感じるダビデの悲しみはいかほどだったことでしょう。自分こそ死ぬべきであった！私のせいでこうなった！私たちはこの悲痛な声で泣き叫ぶダビデの姿をよく見つめなければならないのです。これは主が彼に与えた罪の刈り取りです。罪を犯す生活には、このような報いがあるということです。

しかし同時に私たちはもう一つのことにも考慮に入れるべきだと思います。それはダビデは罪を告白し、神から赦しの宣言をいただいた者であるということです。もし神がダビデの罪を赦してくださったのなら、なぜここまで厳しく取り扱われるのかと私たちは思うかもしれません。しかし神がこうされるのは、もちろんそこに良い目的があるからに他なりません。もし罪を犯して、それを神に告白し、赦されてすべてが終わりになるなら、私たちは罪を軽く考えるようになるに違いありません。罪を犯しても悔い改めれば、どうせまた赦されると考えて。しかしこのような痛い経験を通して、罪の苦さを十

分に味わうことを通して、罪は何と恐ろしく重大なことであるか、身にしみて学ばされるのではないのでしょうか。この取り扱いを通してダビデは罪を心から憎み、今後一層これから離れ、御心に沿うきよい歩みへ向かうようにと助けられるのではないのでしょうか。

私たちは今日の章のダビデが嘆く姿を見つめて、改めて罪の恐ろしさを覚えたいと思います。罪の報いは、その罪を犯した時だけにとどまりません。その刈り取りは、そのあと様々なことを通して続きます。そして事あるごとに今のこの苦しみは私のあの時の罪のためだ！とかつての罪を思い起こさせられ、一層の痛みと悲しみへ追いやられます。そのことを思って警告を受けたい。罪の生活に祝福はない！その道に進まないように！と。

しかし自分は今、まさにこのダビデのような状況にあると思う方もいるかもしれません。その人は主なる神に罪を告白し、赦しをいただいているなら望みがあるということも覚えたいと思います。これは私を懲らしめ、訓練し、私をさらなる聖めと成長へ導こうとする神の愛のむちです。私が罪を心から憎み、その罪を捨て、二度と罪に近づかないように導くための神の取り扱いです。ダビデはこれで捨てられたわけではありません。なお導かれて行きます。罪を赦してくださる神は、このような経験さえ益に変えて用いてくださることを信じて、へりくだって神のあわれみの導きを求め、神の御心に沿う真の祝福の道を歩ませていただくことへ導かれて行きたいと思います。